

橋本光憲著

『ビジネス英語 研究と教育』

(エルコ・2000・本体3300円)

神奈川大学経営学部講師 山内清史

英語に関心を持つ大学生の大半が実戦に役立つ英語を在学中に身につけたいという強い願望を持っている。事業のグローバル化が進む産業界においても英語資格の取得が採用、昇格の条件になるなど「使える英語」への要請が極めて強い。では実戦に強い英語とは何か、これを効果的に習得できる方法とツールはあるのか、という問題への手がかりを本書から汲み取ることができる。

これは、本書の著者橋本光憲氏の経歴に由来する。氏は、30年以上三井銀行（現さくら銀行）で外国為替業務、国内支店運営に携わった後神奈川大学経営学部にて転籍、銀行論、外国為替論、国際ビジネスコミュニケーションなどの教鞭を執っているだけに実務、アカデミア両面に造詣が深い。そんな複眼を持つ氏が、1990年頃から最近までに学会研究誌、大学紀要に書きためた論評を集大成したのが本書である。教育者・研究者は勿論実務家にも示唆に富む。

本書を構成する全9章は、内容により3グループに大別できる。すなわち①利用しやすい用語・用例集の必要性②世界共通語としての英語に関する考察と提言、そして③ESP（具体的な目的のための英語）としてのビジネス英語のあり方である。

いま少し詳しく内容を吟味したい。多分「利用しやすい用語・用例集の必要性」が著者が一番力を入れた部分ではなかろうか。著者はこのテーマに第2、5、6、7章の計162ページを充当し、総ページ数244

ページの実に7割近くを割いているからである。当初は実用英語辞典のユーザーとして勝俣銓吉郎の『新英和活用大辞典』、羽田三郎の『英和貿易産業辞典』などの特徴を解き明かし、遂にはより高い使い勝手を求めて、自分で辞典作りの道に入るまでの記述は読んでいて興味が尽きない。特に著者が編集主幹を務めた『英文ビジネスレター文例大辞典』は「日本語で発想して英語で表現」という実に使い勝手のよい大辞典として誕生した。「外国人だからといって英語の世界に貢献できないわけではない」（本書「まえがき」）という著者の信念がこの大辞典の出版に結集している。

次に、第1章はイントロにあたる部分で、円滑な国際コミュニケーション・ツールとして「国際語としての英語」を学ぶことを著者は推奨している。

残された第3、4、8、9章には、GE（一般英語）とESPに関する著者の主張が盛り込まれている。欧米における研究成果との比較検討がふんだんに織り込まれているのも内容に膨らみを与えている。

冒頭の「役立つ英語」への夢を膨らます実務家や学生にとって「・・・自分自身が時間をかけなければ結果は大して変わらない」（本書「第1章」）という著者の述懐は長年英語の実務と研究と教育に情熱を傾けた著者の言葉であるだけに計り知れない重みを感じさせるであろう。